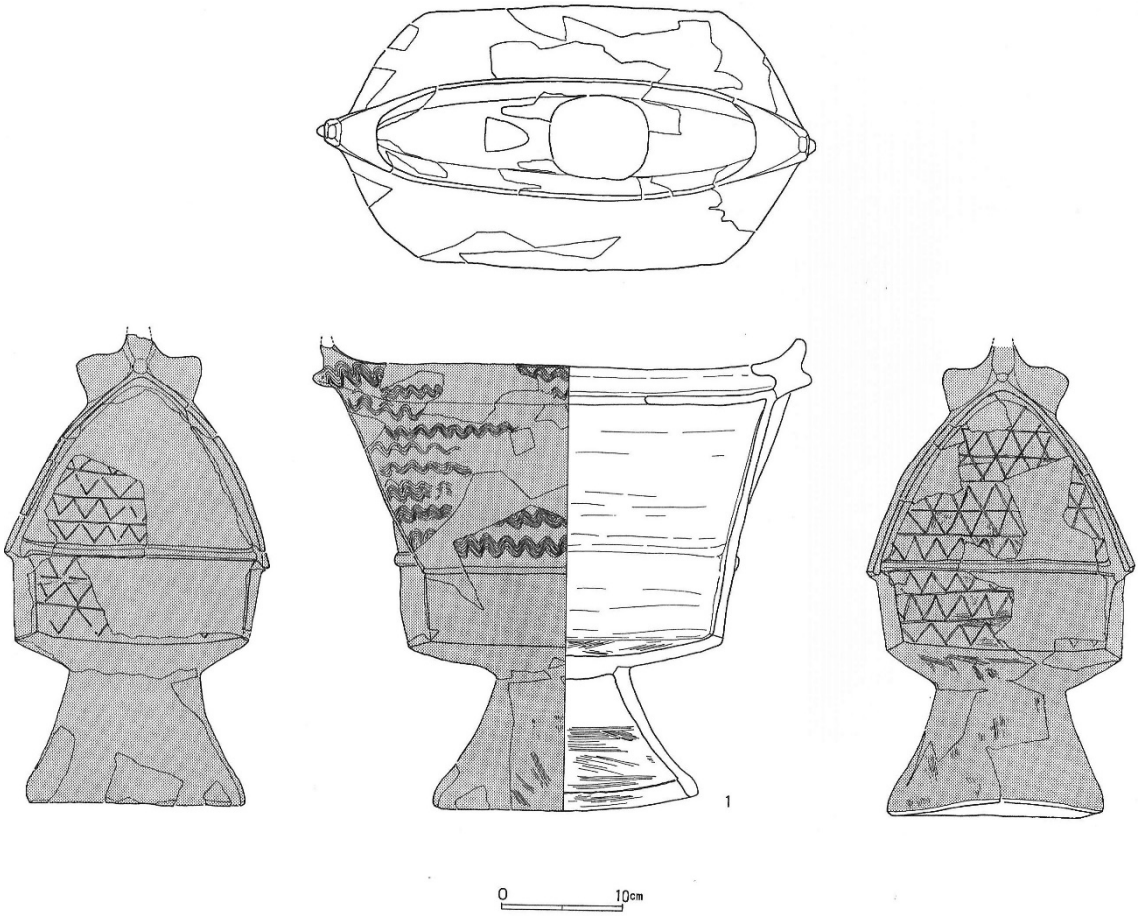
住居の考古学

―先史の住まいを考える―

佐藤兼理（神奈川県立歴史博物館）



厚木市子ノ神遺跡出土　家形土器(望月ほか 1990)

２０２３年１２月２日

於　かながわ県民センター２Ｆホール

学びを深めたい方へのおすすめ図書

石野博信 2006『古代住居のはなし』吉川弘文館

安蒜政雄ほか 2007『住まいの考古学』学生社

1　はじめに

・住まいとは何か

「衣食住」という言葉が存在するように、「住まい」は人間が生活する上で基盤となるものの一つである。雨風や暑さ寒さといった外的環境から守り、安心して食事や睡眠を行うことができるというのが住居の最も基本的な役割である。時代や地域が変わったとしても、この役割は共通していたと考えられる。

しかし、一方で、住まいというのは単純に食事や睡眠を行うだけの場ではない。人々はそこで集団生活を行い、協力をしたり、対立したりしながら暮らしていく。時には、来客をもてなすこともある。おそらく太古の昔も、住まいは最も身近な社交場であったと考えられる。

さらに、住まいにはその世帯や民族の秩序が存在する。食事の作法や座る位置、屋内の利用方法、住居の設計など様々な部分にその影響が及んでいる。現在でも国や地域が異なれば構造や設備が異なるように、住まいには居住する人々がその土地の気候や風土に合わせて育んだ文化や伝統が反映されている。すなわち、住まいにはそこに生活する人々の社会性や文化的な特徴が表れる。言い換えれば、住まいを研究することで、そこに住んでいた人々の文化や伝統、社会がみえてくるのである。それが先史時代であったとしても遺跡から検出された住居には当時の人々の社会や文化に関する何らかの痕跡が残されている。そこから当時の人々の生活の一端を復元することも可能なはずである。

この講座では、竪穴住居を中心とした先史時代の住まいを題材にし、遺跡から発見された痕跡から当時の人々の社会や文化をどう読み解くことができるのかを紹介したい。この講座を通して住居研究の面白さをお伝えできたら幸いである。また、講座内では「住居」と「住まい」という２つの語を用いる。厳密な使い分けは難しいが、前者は主に滞在する場所や建物、後者は滞在場所だけなくそこでの生活の在り方まで含まれる言葉として使用している。

・現代日本の住まいの当たり前を見直す

不動産広告を見ると、「３ＬＤＫ」や「バス・トイレ別」という言葉が見られるように、現代は、住居に居間や調理場、個室、風呂、便所といった設備が標準的に備わっているものと考えられている。しかし、当然ながら、このような設備は先史時代には存在せず、時代が下るにつれて追加されたものである。数千年も前の住まいを考えるには、現在の住まいに対するイメージを一度改める必要がある。

一例を紹介する。発掘された竪穴住居の床面には赤く焼けた部分がしばしば見られる。これは「炉（ろ）」と呼ばれ、屋内で恒常的に火を使用していた証拠となる遺構（いこう）である（図1）。現代の感覚で、屋内で火が使用される目的を考えると「調理」と考えてしまうが、必ずしもそうとは限らないのである。調理用という可能性も十分に考えられるが、調理

は屋外で行われた可能性も指摘されている。そういった視点で炉を考えると「照明」や「暖房」、そして「儀礼」など様々な目的が存在していた可能性も考慮に入れて、検討する必要がある。このような視点をもつことで、人々が住まいに求めたものが多様で、地域や文化によって異なることが分かる。

2　先史時代の住居の種類

はじめに、先史時代の住居の種類について紹介する。今回の講座で扱うのは主に日本列島の旧石器時代から古墳時代の住居である。時期にしておよそ 30000 年前～1400 年前の住居について順を追って紹介していく。この長い時間の中で、人々は自然地形から人工建造物へと居住環境を発展させていく。しかし、時代が下ったからと言って全ての人の住居が竪穴住居や平地住居であったわけではない。古墳時代でも洞窟に居住していた人々は存在している。あくまで全体的な傾向としての住居の変化を示すものである。

①洞窟、岩陰住居

河川や海からの浸食によって崖などに形成された空間を住まいとして利用したもので、最も古いタイプの住居の 1 つと考えられる。現在、日本には約 700 地点ほどの洞窟遺跡が発見されており、その中には住居として利用されていたものも存在する（麻生 2001）。ただし、洞窟が形成される場所は崖や岩場など限定されるため、必ずしも住みやすい立地になるわけではない。そのため、比較的短い期間の住まいであったと考えられる。その中でも、長野県南佐久郡北相木村（きたあいきむら）の栃原岩陰（とちばらいわかげ）遺跡は遺物包含地層が 5 m も堆積し、比較的長期にわたって居住が確認された遺跡である（**図 2**）。主に、縄文時代初期（草創期～早期）に利用され、石組みの炉や全身骨格を含む複数の人骨が発見されている。このほかにも鳥や獣の骨、貝類などが発見されている。当時の人々の集団構成や食生活が明らかとなった重要な遺跡である。

また、神奈川県は全国的にも洞窟遺跡が多く、特に三浦半島に集中している（**図 3**）。海の浸食によって形成された海蝕洞窟が太平洋に面して複数形成されたためである。主に弥生時代から古墳時代にかけて利用され、土器や石器だけでなく、骨角製の漁具や金属製品なども出土している。特徴は、卜骨（ぼっこつ）、卜甲（ぼっこう）などの儀礼的な遺物が出土している点である（**図 4**）。卜骨・卜甲は鹿の骨や亀の甲羅に火箸のようなものをあて、その熱による割れ方から吉兆を占う古代中国の神事である。洞窟遺跡は漁撈（ぎょろう）だけでなく、儀礼など様々な用途で活用されていたことを示す貴重な遺跡である。

②平地住居、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）

平地式住居とは、地面に直接柱を建てた住居のうち、床面が地表と同じ高さになるものを指す。簡素な構造であるため古くから存在したと考えられる。しかし、遺構として残るものは柱穴のみであるため情報は少なく、遺構だけで時期判断は困難である（**図 5**）。

また、高床の建物も柱穴のみが検出されることから、両者を区別することが難しい場合もある。相模原市田名向原遺跡は全国的にも珍しい旧石器時代の住居跡が検出されている（図６）。研究者によって意見が異なる部分もあるが、石器の分布状況や柱穴や炉の跡などから居住空間であったと考えられる。屋根材は不明だが、諸外国の事例から動物の皮などを使用していた可能性が考えられる。

平地式住居は遺構から利用当時の様子を把握することは難しいが、土器や銅鐸などに描かれた絵画表現からその実態を知ることができる（図７）。奈良県唐古・鍵遺跡から出土した土器片には、屋根に装飾が施された楼閣状の建物が描かれていたり、香川県から出土したと伝えられている銅鐸には切妻の屋根をもった建物が描かれたりしている。このほかにも、鏡に描かれるものや家形の土器・埴輪などからその存在を窺い知ることができる。

神奈川県内では、厚木市子ノ神遺跡から家形土器が出土している（表紙図）。あくまで土器として製作されたため、細部は実際の住居とは異なっていると考えられる。しかし、当時の住居が壁材をもち、大きな切妻の屋根をもつことなどの特徴が立体的に窺い知ることができる貴重な資料である。

③竪穴住居（竪穴建物）

竪穴住居は先史時代の遺跡から発掘される住居としては最も一般的なものである。研究者によっては必ずしも「住居」として使用されたとは言えないという立場から「竪穴建物」と表記される場合もある。しかし、先史時代においては全国で一般的に見られ、検出数も豊富であることから、人々の主たる生活場所である可能性が高い。そういった立場から、本講座では「竪穴住居」と表記している。

構造的な特徴は地面を掘り窪め、地表面より低い位置に床面をつくることで、壁を建てなくても住居内の高さを確保できる点である（図８）。柱や炉は基本的には地面に直接設置され、その数や位置は時期や地域によって異なる。そのため、上屋構造も時期や地域によって多様に変化したことが予想される。遺跡公園などで復元されている竪穴住居の屋根は茅葺きのものが多いが、相模原市勝坂遺跡などで土葺きのものも存在したことが確認されている。

３　竪穴住居をより深く

・竪穴住居研究の歴史

竪穴住居研究の歴史を振り返ると、明治時代には「竪穴住居」という言葉が使われ始めて現在まで変わることないことなく用いられていることが分かる。明治初期には、国学者の黒川真頼が先史時代の人々は山腹に横穴を掘って洞窟に居住したと主張しているが、同時期の北海道の探検記や紀行文には竪穴住居の実見録が報告されている。明治時代中期には、日本人人種論争の中で竪穴住居が取り上げられ、坪井正五郎によってコ

ルボックルの住居とする意見が出されたが、小金井良精らによって否定され、太古の日本人の住居だとされた。

最初の発掘事例は、1925 年の柴田常恵による富山県朝日貝塚で発掘された 2 軒の竪穴住居である。その後、1926 年の千葉県姥山貝塚で竪穴住居が群として確認され、組織的な発掘が行われた。複数発見されたことから住居群が集落として認識され、建て替えがなされることも初めて認識された。本格的な研究の開始はこの時期と言える。

1938 年、建築学者の関野克により、埼玉県上福岡貝塚から発掘された住居が拡張して巨大化することから、世帯人数に応じて住まいが変化していくことが指摘された。

戦後は、高度経済成長に伴い発掘件数が増加し、竪穴住居は集落を構成する単位の 1 つとして強く意識されるようになる。また、時代や地域によって住居に違いがあることが判明し、系統的な分類も行われた。さらに、遺物の出土状況から居住者の行動様式を把握しようとする研究が増えるなど、資料の増加に伴って様々な方向に研究が発展していった。

・竪穴住居の構造

一般的に、遺跡から検出される竪穴住居の内部は柱穴と炉や竈の跡が見つかるのみで、柱や屋根が見つかることはほとんどない。しかし、利用当時は柱穴には柱が差し込まれ、梁や桁が組まれ、その上には屋根が葺かれていた（図 9）。さらに、壁面には土留の板が貼付けられ、住居の周囲には竪穴を掘ったときに出た土で住居を囲むような堤が存在したことが分かっている。しかし、長い時間の経過により、そのほとんどの情報が地中で失われてしまう。ゆえに、竪穴住居の分析は主に住居を真上から見た時の平面形、柱穴や炉の数や位置、出入口の位置などを対象に行われる。

しかし、ごくまれに柱材や屋根材が残存する場合がある。そういった住居は焼失したものだったり、低湿地や火山灰に埋もれたものだったりと特殊な条件が必要となる（図 10）。上屋構造などに関する知見は、わずかに検出される残存率の高い住居や絵画土器、埴輪などから得られたもので、復元住居もこのような情報に基づいている。

4　日本の「ポンペイ」

・群馬県黒井峯遺跡の衝撃

1980 年、群馬県子持村（現：渋川市）で 6 世紀中ごろに噴火した軽石の下から遺跡が発見された。黒井峯遺跡と呼ばれるこの遺跡は考古学界に大きな衝撃を与えることになる。軽石層の下には、人々が火山の噴火から逃げ去った直後を彷彿とさせる生々しい村の様子が保存されており、今まで見たこともなかったような新しい情報が数多く提示された。火山灰に埋もれた遺跡として有名なイタリアのポンペイ遺跡と同じ状況であり、黒井峯遺跡は「日本のポンペイ」と呼ばれる。

・古墳時代のムラの実態

発掘されたムラには、住居はもちろんのこと家畜小屋や畑の畝（うね）、柵列など通常の遺跡では残り難いものが次々と発見され、噴火から逃げたであろう人や馬の足跡まで検出された。古墳時代の集落の様子がこれまでにない解像度で出現したことは、群馬県内だけでなく全国的にも大きな話題となった。住居遺構としては柱、床板、壁、竈、屋根、内部構造材、周堤（しゅうてい）などが発見され、当時の人々の居住空間の利用まで判明するほど多くの情報が残されているものであった。中には大きな木製の容器と液体を入れる土器が出土した住居もあり、「酒造小屋」なのではないかと考えられている。

・黒井峯遺跡がもたらしたもの

古墳時代の集落について、かつてない情報をもった黒井峯遺跡の発見は、登呂（とろ）遺跡の発見に匹敵する大発見として全国紙でも大きく報道された。当然ながら、この発見は一般的なニュースとしてだけなく、これまでの考古学研究にも大きな衝撃を与えるものであった。従来の古墳時代の集落モデルは、居住域とは離れた場所に水田や畑などの食糧生産域を設けるものとされていた。しかし、黒井峯遺跡では住居と住居の狭い隙間、今でいえば庭先ぐらいの場所でも耕作を行い、食糧生産をしていたことが判明した（図11）。ごく限られた狭い範囲でも食糧生産が可能であることが判明し、従来の食糧生産体制や集落経営モデルそのものについてもう一度考え直す必要が出てきたのである。黒井峯遺跡は日本考古学における集落研究の大きな画期のひとつであると言えよう。

5　縄文と弥生の住まい

・縄文時代の竪穴住居の特徴

近年の研究の発展により諸説あるが、一般的に竪穴住居が確実に検出されるのは今からおよそ 10000 年前の縄文時代早期と考えられている。そして約 6000 年前の縄文時代中期になると、様々な形態のものが出現し、多様な住まいの在り方が存在したことが判明している。関東地方は全国的に見ても竪穴住居の検出軒数が多く、特に東京の南西部から神奈川の北東部に広がる多摩丘陵地域は住居遺構の分布密度が濃い。集落や住居研究のフィールドとして、これまで多くの研究者が注目してきたエリアである。

この地域で多く見受けられる竪穴住居の特徴は、平面プラン（真上からみた平面形のこと）が楕円形または円形で、５～８個の柱が壁面に沿って円形に配置される。炉は住居の中心に置かれ、周囲を土器や石で囲って区画するものも見られる。住居規模は大きいものでは 10ｍを超えるものも存在し、単純に居住のためだけに建築されたのではなく、作業場や集会所のような役割を果たした可能性も指摘されている。

縄文時代に特徴的な住居として、敷石住居と呼ばれるものが存在する（図 12）。床面にタイルのように大小の平らな石を敷き詰めることからこの名が付いており、入り口部分が突出する平面プランを持つものはその形状から柄鏡形住居と呼ばれることもある。これらは縄文時代中期後半の東日本にみられ、縄文時代の終わりまで継続して築造

される。その特殊な構造から、住まいではなく祭祀(さいし)や儀礼にかかわる施設、または社会的地位が上位の者の住居ではないかとも考えられており、現在でも研究者によって意見が分かれている。

・移動する住居

縄文時代の竪穴住居には、住居の平面プランが重複して検出されるものがしばしば見受けられる (図 13)。これは住居の建て替え、または拡張した結果と考えられている。建て替えの背景には様々な理由が推測されるが、最も一般的なものは住居の耐用年数が過ぎたためだと考えられる。竪穴住居は柱を直接地面に建てるため、時間とともに地面の水分を含み腐ってしまう。研究により竪穴住居の耐用年数は 10～12 年程であることが判明しており、約 10 年ごとに建て替える必要があったと考えられる (小林 2004)。

石井寛(いしいひろし)は多摩丘陵で連続した建て替えの痕跡が多数見られることに注目した。土器の分析から各住居の間には断絶する期間があったことを明らかにし、当時の人々が複数の拠点を移住しながら生活し、一定期間が経つと元いた場所に帰環するという集団行動をとった結果であると結論付けたのである (石井 1977)。

・弥生時代の竪穴住居の特徴

弥生時代の竪穴住居研究の代表的なものは都出比呂志(つでひろし)による住居構造の研究である (都出 1985)。都出は弥生時代には 3 つの住居設計原理が存在し、日本列島の東西で竪穴住居の設計原理が異なることを示した (図 14)。具体的には、列島の西側では、平面プランが円形で中央に炉が置かれ、炉を中心とした同心円状に柱が配置される。東側では、平面プランが長方形で長軸の中心線上の奥に炉が設けられ、中心線に対して対称となるように柱が配置される。前者を「求心構造」、後者を「対称構造」としている。また、九州北部では、円形の平面プランを持ち、炉が住居の中央に配置され、その横に 2 本の柱を置く住居がみられ、朝鮮半島で同様の住居がみられることからその遺跡名をとって「松菊里(しょうぎくり)型住居」と呼ばれる。

このような設計原理の違いが具体的に何を表しているのかについては現在でも不明な点が多い。しかし、少なくとも日本列島の東西で居住文化に違いがあったことは間違いないであろう。

・住居構造の分析―弥生時代の多摩丘陵を中心に―

前述した多摩丘陵地域は弥生時代においても竪穴住居が数多く検出される地域として知られている。弥生時代の住居研究の一つの例としてこの地域の研究を紹介する。

弥生時代後期（紀元 1 世紀頃）の多摩丘陵では、1 つの竪穴住居から系統の異なる土器が共伴して出土する。両者の文様はほぼ混じり合うことはなく、次第に片方の系統の土器がみられなくなる。このような状況から、はじめは共存していた 2 つの集団が一方

に吸収されていくという解釈がなされた（浜田 2015 ほか）。しかし、竪穴住居からみると異なる解釈が可能となるのである（佐藤 2017）。

この時期の多摩丘陵の竪穴住居は大型のものに複数の炉がみられるという特徴がある。このような住居の構造を分析すると、複数の炉をもつ住居は長さが 7m を超えたあたりから出現するようになり、炉の位置は入口近くの左側ないし両側の柱付近であるという特徴をもつことが判明した（図 15）。このような特徴を持つ住居の分布は消えてしまう土器型式の分布とほぼ重なるため、この住居構造は土器型式と同じ集団の伝統に属するものと考えられる。ゆえに、例え土器が存在しなくなったとしても、住居を追うことでその集団の存在を確認できるはずである。この認識のもと、改めて弥生時代後期の南関東を見ると、土器型式が分布しない三浦半島や千葉県の富津岬（ふっつみさき）にもこの住居構造がみられることが分かり、当時の人々の交流範囲の広さが判明したのである。

6　おわりに　ー住居研究の今後ー

・住居研究の現状と重要性

竪穴住居は遺跡から発掘される遺構として最もポピュラーなものの 1 つである。しかし、その一方で、遺構は発掘が終了すると壊されたり埋め戻されたりしてしまうため、土器や石器などの遺物と比べて再検証が困難である。ゆえに、豊富な発掘成果が存在するにもかかわらず、それに比例した研究が行われているとは言い難い。

しかし、当然ながら住居は人々の主たる生活空間の 1 つであり、住居を研究することは当時の人々の社会や文化の解明に少なからず貢献できるものである。日本考古学の研究史を振り返ると、土器研究が研究の基盤となってきたことは明白である。確かに土器研究は重要である。ただ、土器とは異なる視点を持ち、多角的に当時の人々の生活を復元することは今後の考古学研究にとって一層重要性を増すものと思われる。今後の住居研究を進めていく上で、より多くの分析対象が必要であることに異を唱える研究者は少ないはずである。そのためにも、床面の土壌や柱材の分析など理化学的手法を用いながら従来の分析結果に新たな解釈を提示していく必要があるように思われる。

参考文献

麻生優　2001『日本における洞窟遺跡研究』千葉大学・愛知学院大学講義録
石井克己ほか 1987『黒井峯遺跡発掘調査概報』子持村教育委員会
石井 寛　1977「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究収録』第 2 冊
伊藤 郭ほか 1991 『大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター
神沢勇一 1973『間口洞窟遺跡　本文編』神奈川県立博物館発掘調査報告書　第 7 号
小林謙一　2004『縄文社会研究の新視点　–炭素 14 年代測の利用–』六一書房
坂上克弘　1990「小丸遺跡」『全遺跡調査概要』横浜市埋蔵文化財センター
佐藤兼理　2017「中部高地型櫛描文土器分布域における 竪穴住居設計原理」『駿台史学』第 160 号
信州大学編　1984　『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』
田村照良ほか　1997『関耕地遺跡』観福寺北遺跡発掘調査団
田原本町教育委員会編　2006『弥生の絵画』田原本の遺跡４　田原本町教育委員会
千葉 毅 2022『洞窟を掘る―海蝕洞窟の考古学―』神奈川県立歴史博物館
戸田哲也ほか 2003『田名向原遺跡Ⅰ』相模原市教育委員会

中川真人ほか 2009『国指定史跡　勝坂遺跡Ｄ区』相模原市教育委員会
都出比呂志　1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部（都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店に補足付再録）
浜田晋介　2015「朝光寺原式土器からみる集団構成メモ」『列島頭部における弥生後期の変革』六一書房
武藤雄六　1965「長野県諏訪郡富士見町大畑遺跡第三次調査報告」『長野県考古学会誌』3
望月和幸ほか　2004『境沢遺跡』御坂町・御坂町教育委員会
望月幹夫ほか 1990『子ノ神（Ⅲ）』厚木市教育委員会

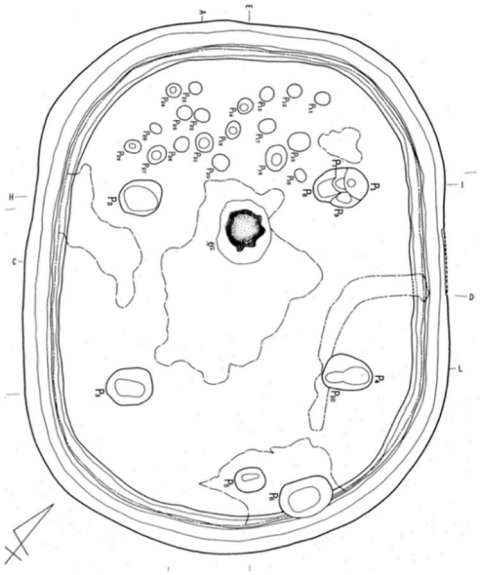


図１　竪穴住居と炉（伊藤ほか 1991）

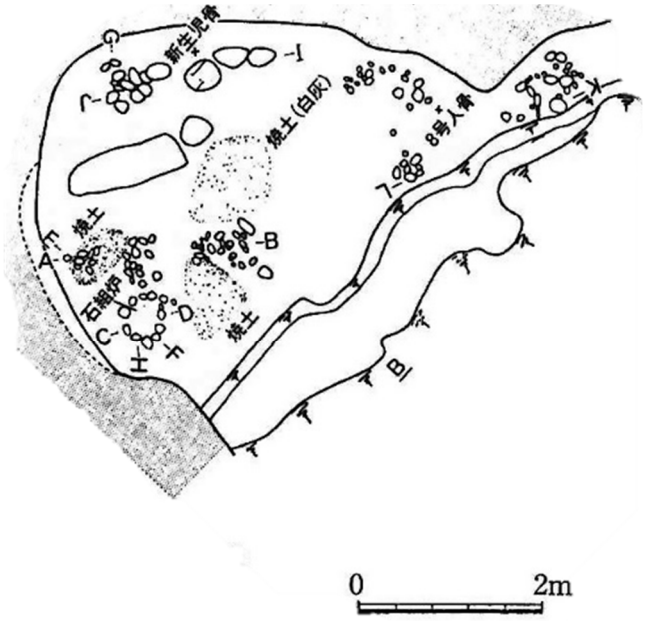


図２　栃原岩陰遺跡（信州大学 1984）

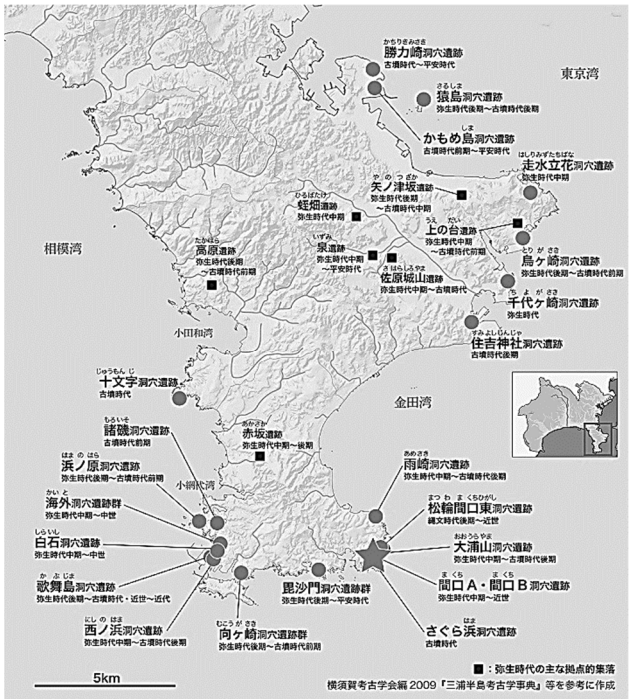


図３　三浦半島の洞窟遺跡分布図（千葉 2022）

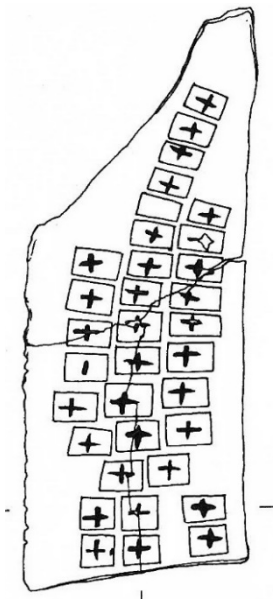


図４間口洞窟遺跡出土卜甲（神沢 1973）

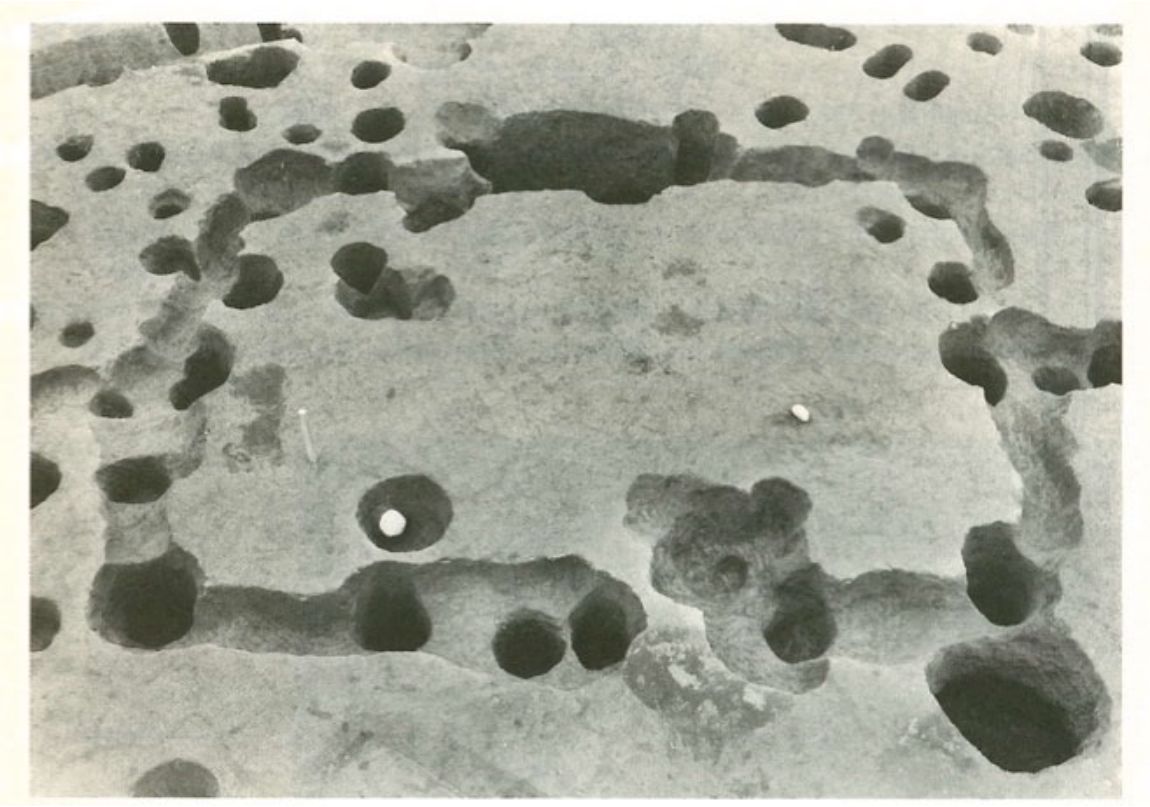


図 5 縄文社会の掘立柱建物（坂上 1990）

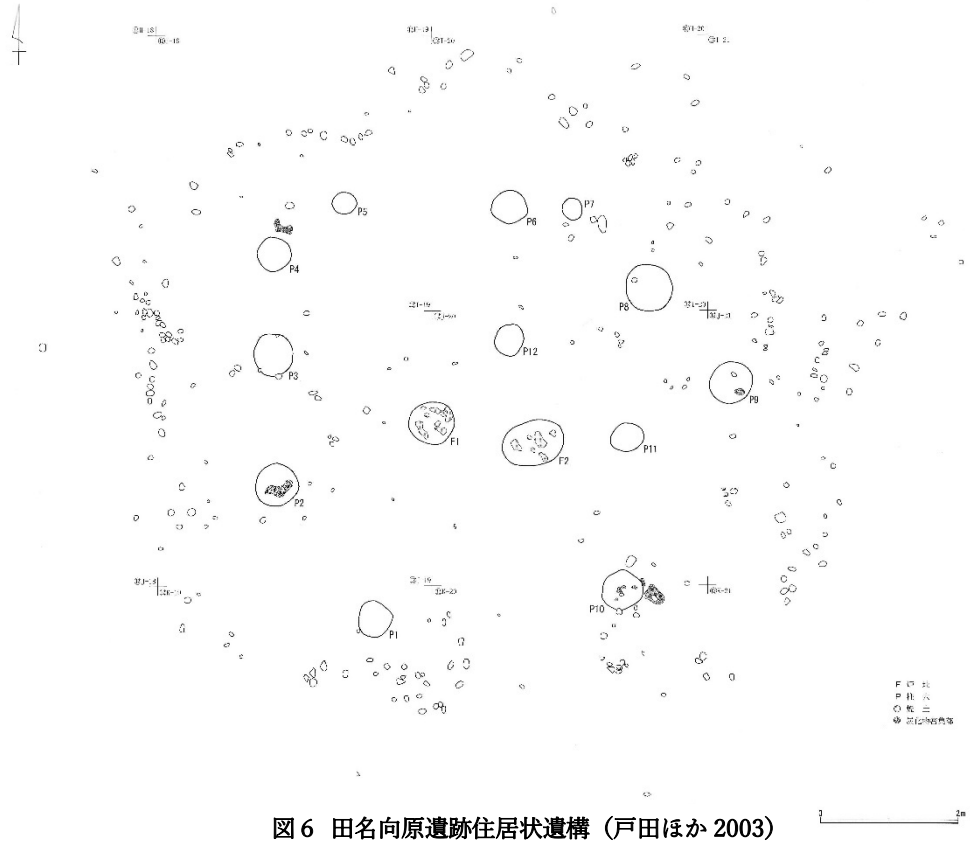


図 6 田名向原遺跡住居状遺構（戸田ほか 2003）

図 7 楼閣が描かれた土器（田原本町教育委員会 2006）

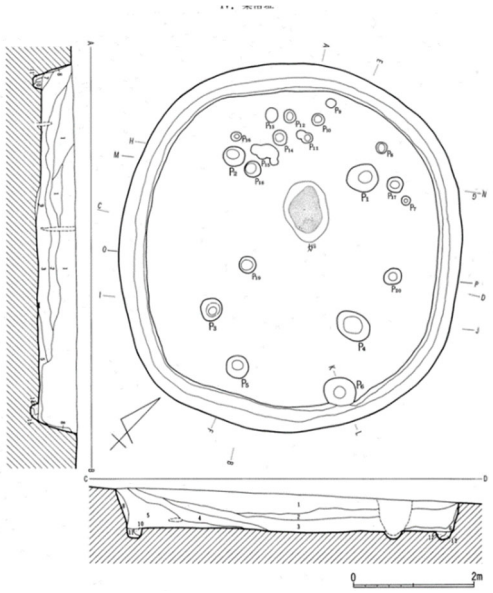


図 8 竪穴住居の検出状況（伊藤ほか 1991）

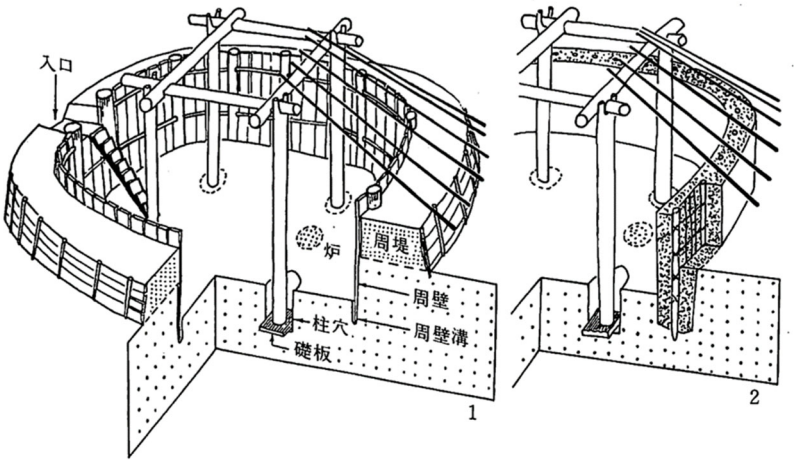


図 9 竪穴住居の復元予想（都出 1989）

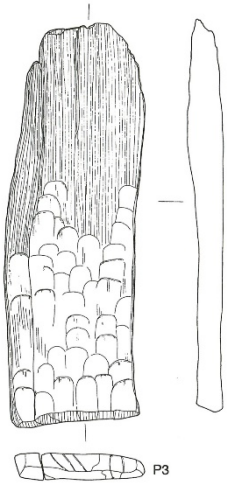


図 10 竪穴住居柱材（望月ほか 2004）

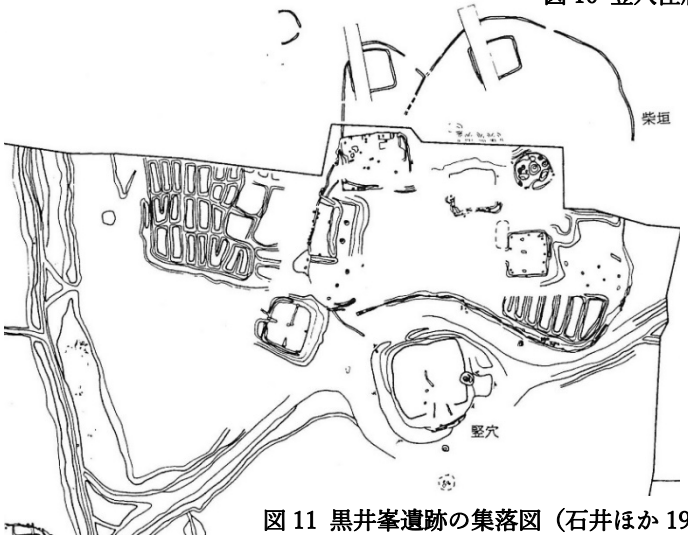


図 11 黒井峯遺跡の集落図（石井ほか 1987）

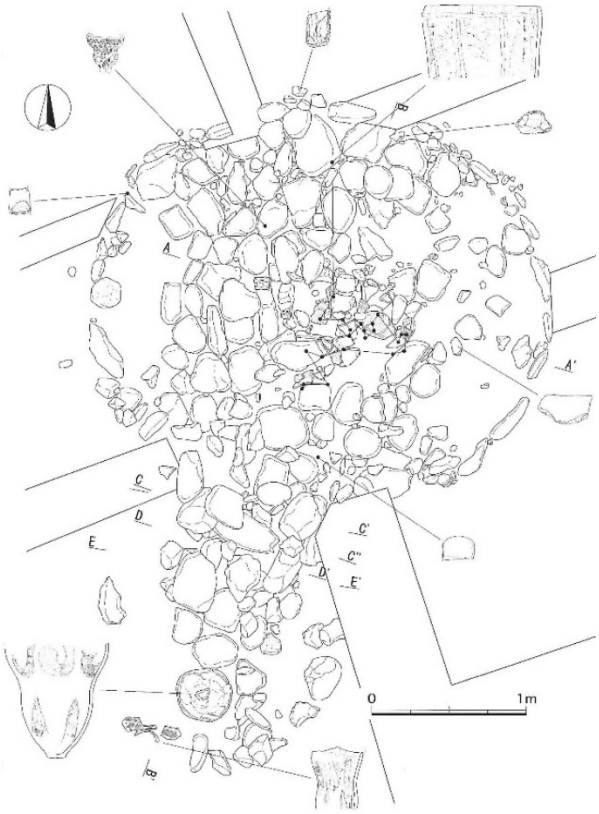


図 12 敷石住居（中川ほか 2009）

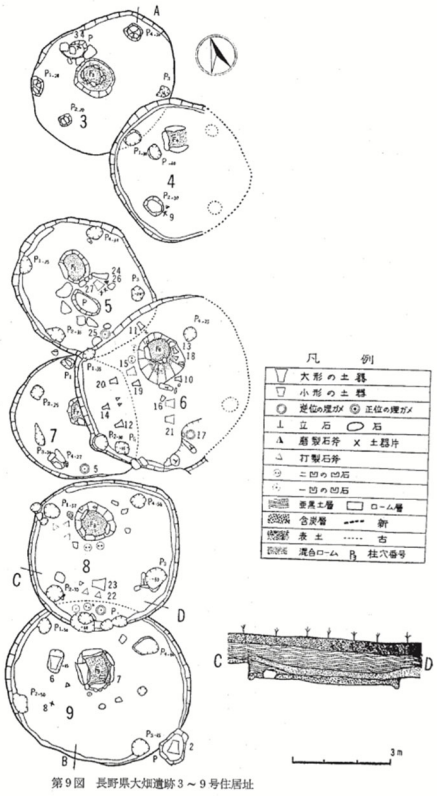


図 13 連続する竪穴住居（武藤 1965）

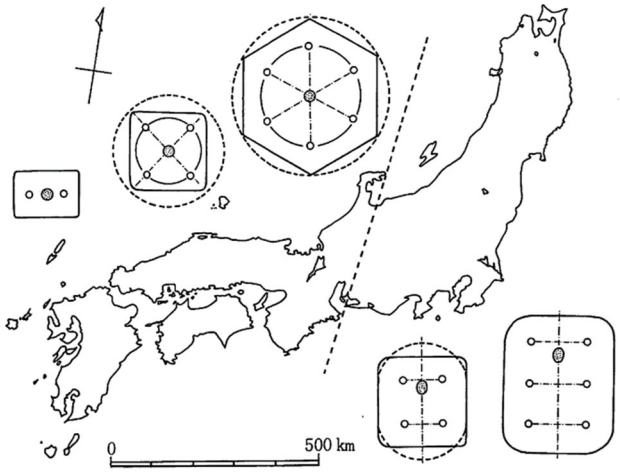


図 14 弥生時代の住居構造（都出 1985）

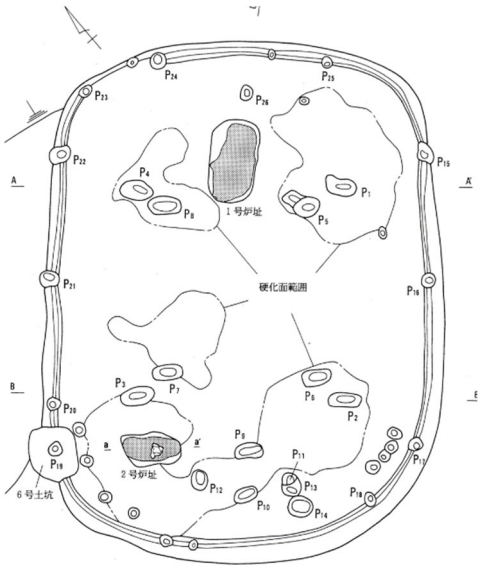


図 15 複数の炉を持つ住居（田村ほか 1997）